世界遺産・紀伊山地の霊場と参詣道

大峯奥駈道の里

下北山村

１３００年続く修験の行場

大峯奥駈道と前鬼の里

魂を清める秘密のみそぎ場

前鬼裏行場「三重の滝」「前鬼・不動七重の滝」

深い古代の森に守られた神仙の庭

「深仙の宿」「釈迦ヶ岳」

龍神が宿る神秘の池

「明神池」と雨乞い物語

World Heritage

Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the

Kii Mountain Range

世界遺産 大峯奥駈道の里

下北山村

1300年前、役行者の時代から
変わらぬたたずまい。
日本を代表する「聖地の中の聖地」
へようこそ！

釈迦ヶ岳頂上直下の紅葉

役行者（634～701）

飛鳥～奈良時代に活躍した修験道の開祖。奈良県の葛城山の麓で生まれ、役小角ともいいます。幼少時より神童の誉高く、土で仏像を作ったり岩に梵語を書いて拝んだりしたといわれています。葛城や金剛、生駒、箕面、熊野の山々で修行し、その後大峯山で蔵王権現を感得。空を飛ぶなどの神通力を駆使しました。讒言により伊豆大島に流されましたが、毎晩海を歩いて富士山で行じたといわれています。その後嫌疑が晴れて大和に帰還し、釈迦ヶ岳で最後の行をしたあと、母と共に箕面で五色の雲に乗り昇天したと伝えられています。

２００４年、「紀伊山地の霊場と参詣道」はアジアを代表する「信仰の山」として、ユネスコの世界遺産に登録されました。

では「信仰の山」とは何でしょう。ユネスコの諮問機関であるイコモスは、このように定義づけています。

「精神と物質が一体となる重要な意味を持つ自然の高み」

紀伊山地の霊場と参詣道は決して過去の遺物ではなく、今なお人々を「聖なる高み」にいざなう特別な力を持つ場所として、その普遍的な価値が世界に認められたのです。

吉野や熊野、高野山など南北の霊場を成立せしめたのは、紀伊半島を貫く大峯の山々と森、岩、そして清らかな水です。中でも「霊場の奥座敷」とも言えるエリアが人里離れた「前鬼」から「釈迦ヶ岳」にかけてのルートであり、ここには役行者の時代から変わらぬ、極めて豊かな自然が残されているのです。

ここは訪れた人に「生きる喜び」、すなわち「命の輝き」を取り戻させる、不思議な力をたたえたところ、「聖地の中の聖地」と呼べる場所なのです。

いにしえの時代から現代に至るまで、あまたの修行者たちに愛されてきた「大峯奥駈道」の里、下北山村。そこに広がる様々な「霊域」と美しい「行者道」の数々をご紹介いたします。

北奥駈道と南奥駈道を分ける「太古の辻」

雪を被った冬の釈迦ヶ岳

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」

「紀伊山地の霊場と参詣道」は修験道の行場である「吉野・大峯」、9世紀初頭に空海が開いた「高野山」、12世紀に庶民から上皇まで数多くの信仰を集めた「熊野三山」の各山岳霊場と、それらを結ぶ「大峯奥駈道」並びに「熊野参詣道」、「高野山町石道」から構成されています。これらの霊場や修行と祈りの道、及び周辺の自然環境は、日本人の信仰と精神に多大な影響を及ぼした「文化的景観」であるとして２００４年7月、世界遺産（文化遺産）に登録されました。

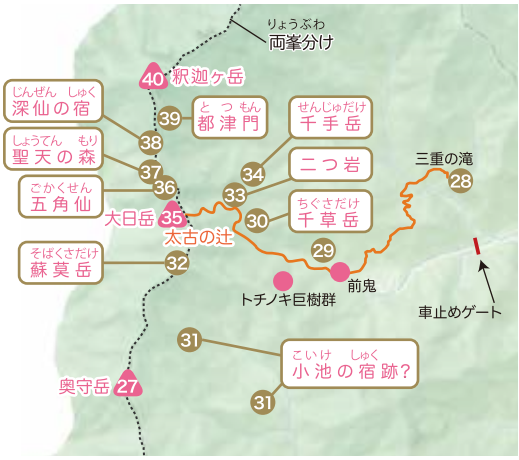
「深仙の宿」３８番目の靡。役行者の最後の行場であり、「灌頂堂」がたたずんでいます。

世界遺産「大峯奥駈道」の心臓部

至福の霊場 太古の辻―大日岳―深仙の宿―釈迦ヶ岳

世界遺産に登録されている「大峯奥駈道」は、「金峯山寺蔵王堂」のある吉野や「大峯山寺」がある「山上ヶ岳」を経て「熊野三山」に至る、およそ８０キロの修行の道です。

役行者が7世紀後半に開いたとされていて、多くが１０００～１９００ｍの険しい峰々を越える「尾根道」です。これを一週間かけて踏破する「奥駈け」は修験道では最も重視される行で、山中には７５ヶ所の「靡」と呼ばれる霊場が残されています。



下北山村には18から42まで計25ヶ所の「靡」がありますが、「奥駈けの心臓部」とも言えるのが、ちょうど75「靡」の中央に位置する38番目の「靡」の「深仙の宿」と、その南の「大日岳」、北の「釈迦ヶ岳」です。中でも美しいピラミッド型の「釈迦ヶ岳」は「大峯一の秀峰」とも呼ばれており、「続日本百名山」にも選ばれました。

「靡」というのは「役行者になびく」という意味を持つ言葉なのですが、数多くの「靡」が集中する下北山村は、昇天を前にした役行者が神仙たちと「この世での最後の行」を行った、非常に特別な「聖地」とされています。

前鬼周辺の靡

「靡」とは修験者たちが礼拝や修行を行う霊場のことです。平安時代中ごろ、大峯山中には１２０ヶ所の「靡」がありましたが、それが次第に整理されて近世には７５ヶ所となりました。前鬼周辺の「靡」が「大峯奥駈道」の行程と一致しないのは、前鬼は江戸時代まで教育の場を兼ねた修験の一大修行拠点であり、修験者たちはここに滞在しながら四方の行場に出かけたからだと言われています。

「胎蔵界」の信仰拠点

弟子たちの末裔が宿坊を営む「前鬼」の里

役行者には「前鬼」（別名「義覚」）と、「後鬼」（別名「義賢」）という弟子夫婦がおりました。二人はもともと生駒山の暗峠で人の子をさらって食べる鬼でしたが、役行者が夫婦の子供を隠しておびき出し、今までの所業を悔い改めるよう諭しました。反省した二匹の鬼は人間の姿に変えられ、役行者の従者となったのです。

常に役行者の前を歩いたのが、手に斧を持った赤鬼の「前鬼」、後ろを歩いたのがその妻で水瓶を持った青鬼の「後鬼」だといわれています。この夫婦とその五人の子供たち「五鬼助、五鬼継、五鬼上、五鬼童、五鬼熊」が住んだのが「前鬼」という集落です。明治の半ばまで彼らの子孫による五つの宿坊があり、田畑を耕しながら「大峯奥駈道」を行く修行者たちを支えてきました。

また15キロほどの距離にある「池原」の集落からも、毎日のように物資を運ぶ人足が入山していたといいます。今は61代目当主である五鬼助義之さんが、「前鬼山小仲坊」を守っています。

「大峯奥駈道」は「釈迦ヶ岳」の北に位置する「両峯分け」を境に、そこから北を「金剛界」、南を「胎蔵界」とみなしてきました。その北の玄関口が「金峯山寺蔵王堂」のある「吉野」、南の玄関口が「熊野本宮大社」、「熊野速玉大社」「熊野那智大社」の「熊野三山」です。

このうち「金剛界」では女人結界の「山上ヶ岳」が、また「胎蔵界」では「前鬼」から「釈迦ヶ岳」にかけてが山中の修行拠点でした。「前鬼」の里は今は休日以外はひっそりとしていますが、周囲に本格的な岩場や滝、洞窟などが点在するため江戸時代には「大峯修験」の一大拠点であり、数多くの山伏たちが起居を共にしていました。

「前鬼」は今も、修行を志す者や山を愛する人々にとっては俗塵の汚れを落とす聖域の入り口であり、朝焼けや夕焼け、満天の星空が美しい別天地です。夏には、森の奥から一晩中「フィーン、フィーン」と鳴くトラツグミのもの悲しい声。文明の喧騒から離れて自分を見つめ直すのに、これほどふさわしい場所はありません。

「小仲坊」裏の宿坊跡
前鬼には小仲坊以外の四つの宿坊跡があり、鬱蒼とした青苔と樹林に覆われています。

前鬼山小仲坊
宿坊から登山道に入ると自然林の森となり、春は新緑、秋は錦の紅葉に包まれます。

前鬼のトチノキ巨樹群（奈良県指定天然記念物）
前鬼から太古の辻方面へ20分登り、左の涸れ沢を横切って500mほど登ると、道の左側の谷沿いにトチの巨木が現れます。中には幹周りが10mを越す「霊木」もあります。

○前鬼の五坊

五鬼助（ごきじょ）：小仲坊
五鬼継（ごきつぐ）：森本坊
五鬼上（ごきじょう）：中之坊
五鬼童（ごきどう）：不動坊
五鬼熊（ごきぐま）：行者坊

「前鬼山小仲坊」宿泊情報

【宿泊】▼1泊二食（要予約）8000円　弁当500円
土日祝・連休・年末年始営業　収容人員50人
▼素泊まり（無人宿泊所）4000円　布団あり
【電話】▼土日祝07468－5－2210（小仲坊現地）
▼平日072－834－1074（五鬼助義之さん）
【設備】▼営業時のみ自家発電　夜9時消灯▼チップ制水洗トイレ
【食事】▼夕食6時▼朝食5時（2時、3時などの早暁朝食も対応可能）

行者堂のお地蔵様

林道から仰ぐ「大日岳」

【前鬼のトチノキへのコースタイム】

▼ゲートからトチノキまで、約3キロ　行き60分＋帰り45分

国道169号線「前鬼口」 ⇄（車）25分・（徒歩登り）2時間30分 / （車）25分・（徒歩下り）2時間 ⇄ 林道終点 車止めゲート

前鬼の宿坊「小仲坊」 ⇄（登り）40分 / （下り）30分 ⇄ 前鬼のトチノキ巨樹群

前鬼の宿坊「小仲坊」 ⇄（登り）20分 / （下り）15分 ⇄ 前鬼のトチノキ巨樹群

※巨樹群を案内する標識はありません。三本の巨木は登山道から外れ、苔むした川石が広がる涸れ沢に立っています。

Ⓓ胎蔵界窟

ここより上が「屏風の横駈け」「天の二十八宿」と呼ばれる断崖絶壁の「裏行場」。それを越えると「馬頭の滝」が現れます。

Ⓑ垢離取場

「垢離」とは「身についた罪・穢れ」のこと。
今も修験者たちは、この淵に首まで浸かって心身を清めます。
２０１１年の台風で砂州が流されたため、膝まで水に入って淵を渡らなければなりません。

Ⓐ閼伽坂地蔵

閼伽坂峠にまつられているお地蔵様。
「閼伽」とはサンスクリット「アルギャ」の音訳で、神仏にお供えする霊水のことです。英[aqua]の語源とも言われています。

大峯随一、渓谷の禊場「三重の滝」

前鬼裏行場

前鬼からは世界遺産エリア。

「小仲坊」から「釈迦ヶ岳」にかけての登拝を指す「表」の行に対し、「裏行場」は前鬼川上流の美しい渓谷に広がる禊場と岩場のことです。三つの滝が連続する28番目の靡「三重の滝」まで一時間半。

「小仲坊」の向かって右手から「閼伽坂峠」Ⓐを目指して登ります。峠で「閼伽坂地蔵」に祈ったあとは急坂を下ります。川底で左に折れて巨大な石を越えるとエメラルド・グリーンの「垢離取場」Ⓑに到着。この美しい淵を膝まで水に浸かって渡るか岩場を飛ぶかして対岸に渡り、岩に打ち付けられた鉄の足場を登って右折。山腹を登ったあと急な階段を降りると「千手の滝」Ⓒに到着します。

そこから下をのぞくと、清冽な「不動の滝」の落ち口が見えますが、滑りやすいので決して身を乗り出さないようにしてください。

「千手の滝」の向かって右側の崖を登るとすぐ真横から滝を眺められる「滝見台」のテラスが現れ、そこに役行者が作ったと言われる「胎蔵界窟」Ⓓがあります。中には役行者と前鬼・後鬼像がまつられています。

この「胎蔵界窟」の右手には「金剛界窟」という洞窟もあり、二つ合わせて「両界窟」と呼ばれていますが、一般のハイカーはここまでです。この後は「山上ヶ岳」と共に大峯随一と並び称される厳しい岩場が連続します。

ここで修行をした西行はこのように詠みました。

身に積もる
言葉の罪も洗われて
心澄みぬるみかさねの滝

「千手の滝」からは再び「垢離取場」を経て、「小仲坊」に帰ります。

Ⓒ「三重の滝」のうちの一つ「千手の滝」(落差50m)

この下に「不動の滝」(落差６０m)が、また断崖(ハイカーは不可)を登った先には「馬頭の滝」(落差４５m)があり、三つ合わせて「三重の滝」と呼びます。

【三重の滝へのコースタイム】
▼前鬼「小仲坊」から「千手の滝」まで約２キロ
▼行き1時間30分＋帰り1時間40分

前鬼の宿坊「小仲坊」 (登り)30分 / (下り)20分 → Ⓐ閼伽坂峠 (下り)30分 / (登り)50分 → Ⓑ垢離取場 (登り下り)30分 / (登り下り)30分 → Ⓒ三重の滝(千手の滝)

Ⓕ 前鬼・不動七重の滝
林道途上の展望所から。右上が上から３段目、左下が６段目の滝。累々と連なる総落差１６０ｍの滝のため、７段全てが一度に見られる場所はありません。

【前鬼・不動七重の滝へのコースタイム】

▼森林浴歩道入り口から展望台まで片道約１．３キロ
▼行き５０分＋帰り５０分

国道１６９号線「前鬼口」」 ⇄ (車)15分(徒歩登り1時間40分) / (車)15分(徒歩下り1時間30分) ⇄ Ⓔ森林浴歩道入口 ⇄ (下り)15分 / (登り)25分

吊り橋 ⇄ (ほぼ水平)15分 / (ほぼ水平)15分 ⇄ Ⓖ河原終点階段登り口 ⇄ (登り)20分 / (下り)10分 ⇄ 滝見台

Ⓔ森林浴歩道入口
遊歩道の入口看板。車２台駐車可。

Ⓖ７段目の滝と淵
河原の終点から見える７段目の滝。

もうひとつの神域

日本の滝百選 秘密の行場「前鬼・不動七重の滝」

総落差およそ１６０ｍ、「日本の滝百選」に選ばれている関西随一の豪瀑、「前鬼・不動七重の滝」です。

国道１６９号線下北山村の北の玄関口、白い「前鬼橋」のたもとの「前鬼口」から林道に入ってください。春には艶やかなミツバツツジを眺めながら約６キロ進んだところに「前鬼不動七重の滝 森林浴歩道」Ⓔと書かれた看板があります。（Ｐ２台）

そこを通り過ぎて１００ｍ進むと、ガードレール越しに７段目の滝と美しい渓流が望めるビューポイントがあります。さらに６００ｍ行くと、滝を真正面から望む「展望所」Ⓕがあります。新緑や紅葉の頃は、多くのカメラマンで賑わいます。（Ｐ５台）

直接滝に向かうには「前鬼不動七重滝 森林浴歩道」の看板から、階段状のジグザグ道を谷底まで下ります。標高差およそ７０ｍ。そこから川沿いに平坦な小道を歩き、鉄製の吊り橋を渡ります。渡ったら左に折れ、林を抜けると目の前に神秘的な岩と清流、原生の森が織り成す絶景が次々と現れます。春にはシャクナゲ、初夏にはカワツツジ（原種のサツキ）が随所に咲き誇り、水面から顔をのぞかせた岩の上では、カジカが「ヒョロロロロ・・・」と澄んだ声を響かせます。気をつけていればカワセミが、パシャリと水に飛び込む瞬間を見られるかもしれません。

河原の終点Ⓖへ向かうと、少し手前の右手の崖にアルミの急階段が現れます。およそ９００段ある階段を登り降りしながら２０分ほど進むと、３段目の「大滝」（落差８０ｍ）が目の前に見える「滝見台」に出ます。ここで水しぶきと瀑音（ばくおん）の洗礼を受けましょう。眼下にはエメラルドグリーンの滝壺（たきつぼ）が広がり、４段目、５段目の滝も視界に入ります。晴れた日には「大滝」の中ほどに虹がかかりますが、谷が深いため午後３時には日が陰ってしまいます。

時間が許せば、河原で休憩いたしましょう。谷に響き渡る「ピョーッ」というホンドジカの声に耳を澄ましサワサワと木の葉を揺らす川風に吹かれていると、深山幽谷に住む仙人の境地になれるかもしれません。

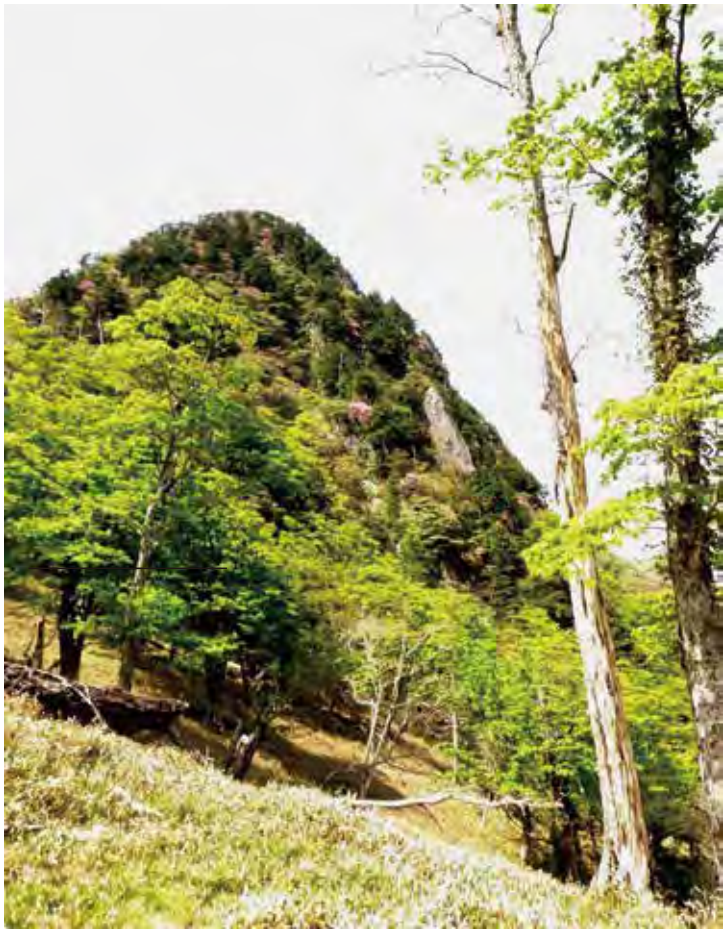
実際ここは、修行者たちにとっては「理想的な行場」であり、今でも時折川原で瞑想する人を見かけることがあるといわれています。

神仙が舞う霊峰

祈願成就の「二つ岩」と霊的シンボル「大日岳」

標高1799mの「釈迦ヶ岳」まで「前鬼」から登るコースは標高差1000m、休憩無しで片道4時間半の健脚向き。「大日岳」にも登るなら、5時間はみておかなければなりません。

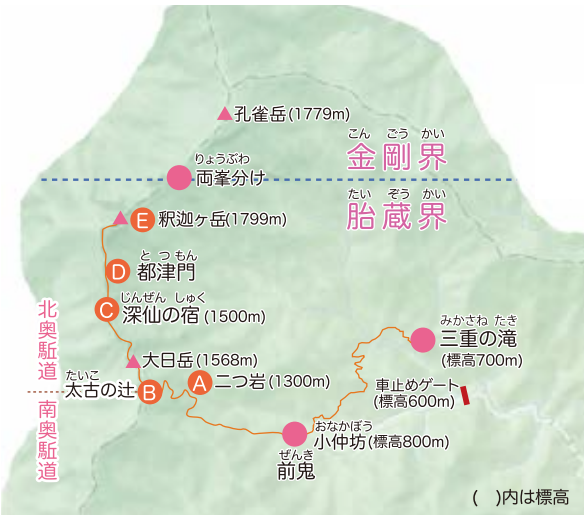
「小仲坊」を早朝に出発。宿坊の裏には、他の四つの宿坊跡と石積みが随所に残されています。やがて杉林が尽きると、栃の古木が点在する原生の森。谷風が心地よい木陰の中を、ひたすら登り続けます。



Ⓑ「太古の辻」から眺める「大日岳」
この反対側に30mの岩場があります。鎖がつけられていますが、岩場の一部が崩壊したため修験道では現在この岩場を登っておりません。西側の巻き道を登ってください。

いくつもの涸れ沢を越えてしばらく行くと、高さ8メートルはあろうかと思われる2体の奇岩に出迎えられます。不動明王の「眷属」である「矜羯羅童子」、「制多迦童子」とされる33番目の「靡」、「二つ岩」Ⓐです(「二つ石」とも呼ばれています)。「仙人が舞う地」とされるこの岩の舞台の間からは「釈迦ヶ岳」とその山腹に広がる「五百羅漢」の岩塔群が望め、登山道から三度上り下りして「釈迦ヶ岳」に祈ると、願いが叶うと言われています。

Ⓐ祈願所「二つ岩」



木の階段と土道をさらに上がると、やがて笹原が広がる絵のように美しい「太古の辻」Ⓑに到着します。「太古の辻」は「北奥駈道」と「南奥駈道」の分岐であり、ここから「釈迦ヶ岳」までの稜線は、「仙人の住む他界」と考えられている特別に聖なるエリアです。一方、真正面には堂々とそびえる「大日岳」(1568m)。「金剛界」・「胎蔵界」を表しているとされる「大峯山脈」の霊的シンボルとも言える名峰です。

【釈迦ヶ岳へのコースタイム】

▼ゲートから釈迦ヶ岳まで　登り5時間(大日岳経由)+下り3時間30分

- 国道169号線「前鬼口」 ⇄ (車)25分(徒歩登り2時間30分) / (車)25分(徒歩下り2時間) ⇄ 林道終点車止めゲート ⇄ (登り)40分 / (下り)30分
- 前鬼の宿坊「小仲坊」 ⇄ (登り)1時間20分 / (下り)1時間 ⇄ Ⓐ「二つ岩」(別名・二つ石) ⇄ (登り)1時間 / (下り)40分 ⇄ Ⓑ北奥駈けと南奥駈けの分岐「太古の辻」
- 大日岳経由・聖天の森(登り下り)1時間 / 聖天の森のみ(緩い登り下り)40分 ⇄ Ⓒ「深仙の宿」 ⇄ (登り)1時間 / (下り)40分 ⇄ 200名山 Ⓔ「釈迦ヶ岳」

最勝の行場

霊水が湧き出る神々の庭「深仙の宿」

「大日岳」を降りて「聖天の森」を半時間ほど登り降りすると、避難小屋と「灌頂堂」がたたずみバイケイ草が咲き乱れる「深仙の宿」Ⓒにたどり着きます。見通しのよい鞍部にあるこの「宿」は役行者が瞑想を行ったいわば「神の庭」であり、また彼の祈願によって数百の仙人や神々が現れたため「深禅」、もしくは「神山」と記されることもあります。

役行者はここで天から直接秘法を授かったといわれています。また昇天前にはこの世で行う最後の行として、ここで一千基の卒塔婆を建てて法要を行ったと伝えられています。そのためここは「本山派」の修験では「伝法灌頂」の儀式が行われる、特別な霊場とみなされてきました。現在も本格的な「参籠」に使われることがあります。

Ⓓ「都津門」
「深仙の宿」の少し先にある３９番目の「靡」。くぐると極楽に行けるとされていますが、危険なため行は禁止されています。

「深仙の宿」から１００ｍ余り北に進むと、「天のへそ」から流れ出していると言われる「香精水」が滴っています。ここは役行者が岩壁にお経を納めようとしたところ、突然岩が割れてお経が吸い込まれたとの伝説が残る場所で、水はその割れ目から流れ出しているともいわれています。

修験道の「灌頂の儀式」にはこの霊水が使われてきましたが、これは「万病治癒の霊水」として大峯では唯一、行者が里へ持ち帰ってもよいものとされてきました。

西行はここでの修行をこう詠んでいます。

深き山に澄みける月をみざりせば
思出もなき我身ならまし

「香精水」の手前には、神々とここで最後の行を行った役行者が、形見として弟子に遺した髭を埋めた「髭塚」の石塔があります。

Ⓒ修験の聖地「深仙の宿」
左の赤い屋根が「灌頂堂」。その奥に「香精水」がありますが、秋には涸れることもあります。背後には「四天石」と呼ばれる巨岩が鎮座しています。

威風堂々

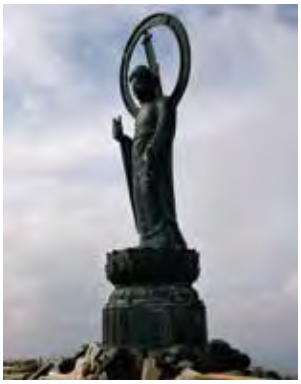
類稀な磁力を秘める聖峰「釈迦ヶ岳」

「深仙の宿」からしばらく登り、小ピークから「釈迦ヶ岳」の東を眺めると、山腹に巨大な岩塔群が屹立しているのが目に入ります。「五百羅漢」と呼ばれ、修行者を護る大峯の神仙たちだと考えられています。

笹原の中をなおも登ると、やがて十津川方面からの道と合流し、「釈迦如来像」Ⓔの立つ頂上へ。「大峯奥駈道」の中では「釈迦誕生の地」とされる北の「仏生ヶ岳」(標高１８０５ｍ)に対し、「釈迦ヶ岳」(標高１７９９ｍ)は「釈迦入滅の地」、すなわち「釈迦如来の住む他界」とみなされていて、数多くの修行者たちがここで祈りを捧げてきました。

「大峯山」はもともと、「釈迦如来」が説法をしたインドの「霊鷲山」が、人々を救うためにこの地に飛んできたものだといわれています。インドではこうした様々な伝説に彩られた「聖地」のことを「ティールタ」(語源は「川の浅瀬・渡し場」)と言いますが、本土一の「磁力」を持つ「釈迦ヶ岳」は、「日本のティールタ」と呼ぶにふさわしい正真正銘の「巡礼地」。「此岸」である「無常の世界」から「彼岸」である「永遠の世界」へ渡るための、「聖地の中の聖地」と考えられてきました。

確かに現代でも、ここをよく訪れる行者によると、「釈迦ヶ岳」の頂上では鳳凰の形をした 美しい雲が全天に広がることがしばしばあるということです。例えそのような体験ができなくとも、亜高山帯の針葉樹――トウヒの森――に囲まれたこの山の頂きに座っているだけで、魂のふるさとに帰ったような安らぎと喜びを感じることができるでしょう。



Ⓔ釈迦ヶ岳の釈迦如来像
吉野の強力岡田雅行が、大正１３年に像を三分割して前鬼から運びました。２００７年に再建されました。

Ⓔ晩秋の「釈迦ヶ岳」
「持経の宿」から池原に向かう下山路より遠望。

池神社

明神池　風が無く澄んだ夜には、稜線の上の星が池に映り込みます。

明神池（みょうじんいけ）

標高370mの峰の上にある天然池。20万年前に川底が隆起し、川がせき止められてできたといわれています。池原を流れる「北山川」より170m以上高い場所にあり、また池の深さも1.5〜7mと起伏に富んでいます。

ヤマガラ

木漏れ日が差す湖畔の遊歩道

【明神池周遊コースタイム】

▼国道169号線「上池原」の信号で国道425号線に入り、ヘアピンカーブを登り切ると「明神池」です。（信号から3キロ）
▼湖畔コース：約1キロ 20分（ほぼ平坦な杉木立の道です）
▼稜線コース：約2.6キロ 40分（丸木の急階段があります）

水神が潜む神秘の池

「池峯大明神（いけみねだいみょうじん）」だった「池神社（いけじんじゃ）」の由来

「明神池」は周囲およそ1キロメートル。奈良県内では最も大きい天然池です。池のほとりには、役行者（634〜701）が神気に打たれて開いたとされる「池神社」がたたずんでいます。

「池神社」の主祭神は「市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）」。しかし明治元年（1868年）の「神仏判然令」以前、「池神社」は「池峯大明神」と呼ばれていました。村の古老によると、江戸時代まで「池神社」にまつられていた御神像は「錫杖（しゃくじょう）を持ち膝（ひざ）を曲げていた」ということです。つまりここは役行者をまつる「行者堂」であったということです。事実、神仏習合の江戸時代には、祭儀は村にある四つ（現在は三つ）のお寺の住職と「前鬼（ぜんき）」から来た山伏が、交互に執り行っていました。

下北山村は「大峯奥駈道」の南部を支える修験の里であり、その信仰の中心にあったのが「池神社」でした。現在御神像は、宮司さえ開けてはならない秘仏として本殿にまつられています。では、開山伝説をご紹介いたします。

水神（すいじん）の怒りを鎮めた役行者

天武天皇（在位673〜686）時代の「白鳳（はくほう）年間」のことです。ある日突然「明神池」からおどろおどろしい地鳴りのような音が聞こえてきました。村人がかけつけると、周囲の木々がザワザワと震え、池の水面が波立ち荒れ狂っているではありませんか。しかもゴウゴウという音は、その池の中から聞こえてくるのです。

「池の水神（すいじん）様が怒ってなさる」

誰もがそう思い恐れおののきましたが、どうすることもできません。

そんなとき役行者が、この村を通りかかりました。村人に懇願された役行者は池のほとりに座り込み、三日三晩、不眠不休で祈祷を続けました。

すると四日目の暁になってようやく、荒れ狂っていた池が静かになり物音ひとつしなくなったのです。やがて東の空が茜色（あかね）に染まり、美しい朝の光が池に降り注ぎました。役行者は瞑想を終えると、村人に水神（すいじん）をまつるための社を建てるよう命じました。池は「明神池」と名付けられました。

大峯禅定の秘所 池之峯

またこのような伝説もあります。

池之峯(現在は池峰と呼ばれている)という地に「ヌシが棲む神秘の池」として村人に畏れられている池がある――。その評判を聞いた役行者が大峰山脈から下りてきてこの池のほとりに立ったとき、幽玄な池の神気に打たれて深く感動し、この地に神社を開いたと伝えられています。

このとき役行者は池原から池峰に上がった「辻堂峠」付近のヒノキの巨木の根元で、瞑想を行なったといわれています。役行者はここでの瞑想中にも、素晴らしい「妙音」の祝福を受けたのでしょう。「明神池」はかつては「琵琶池」とも呼ばれていました。(「琵琶」は別名「妙音天」とも呼ばれる「弁才天」が手にしている楽器です。川や池などの水の神であるこの女神は、修行者が悟りに至るのを助ける神と考えられてきました)

別の伝説はこう語ります。三重県の紀伊長島にいた役行者が、大峯山に入る途中この池に立ち寄りました。ただならぬ神気を感じた役行者がここで祈願をし池に卵を投げ入れると、「白い大蛇」が水面に現れてスーッと泳ぎ回ったそうです。これは「神の眷属」である「白龍」が現れたもので、「水神」の正体であるとも言われています。こうしたことから、「明神池」は大峯修験における「秘密の行場」とみなされてきました。

「転法輪岳」から望む大峯南奥駈けの山並み　(右上が「笠捨山」)

大峯南奥駈け「涅槃岳」への道

大峯南奥駈道は奥深い森が続く 修行にふさわしい静寂境です。

浦向から仰ぐ「行仙岳」前山の夕暮れ

「笠捨峠」は「行仙岳」と「笠捨山」の間の「行仙の宿」付近で稜線を越えます。戦前までは 米などの物資を運ぶ貴重 なルートでした。下北山村の集落は、大峯奥駈道にあるいくつもの「宿」の物資補給地としての役割も果たしてきました。

「笠捨峠」の大蛇退治

「明神池」には、「大蛇」にまつわる伝説も残されています。

役行者が大峰山脈で修行をしていたとき、「行仙の宿」付近で十津川村から下北山村に抜ける「笠捨峠」に、山越えをする人々に悪さをする大蛇がいると聞きました。そこで役行者は峠に赴き大蛇と遭遇。鉄の高下駄で踏みつけ錫杖で跳ね飛ばしたところ、尾は奈良市の「猿沢池」に、頭は熊野市の「有馬の池」(現在の山崎運動公園)に、胴は「明神池」に落ちたといわれています。

様々な伝説がありますが、いずれにしても「明神池」が特別な力を宿す「神秘の池」であり、それ故役行者がここに神社を作ったということは間違いなさそうです。だからこそ何か不敬なことを行うと、「ヌシ」とも呼ばれる池の「水神」―おそらく「白龍」―が怒り狂うということなのでしょう。役行者が「悪さをする大蛇」を投げ入れたというのも、この池が「邪を封じる霊力」を持っていたからだと考えられています。

その証拠とも言うべき不可思議な現象の数々を、次の「明神池の七不思議」でご紹介いたします。

今なお生きる奇しき伝承

明神池の七不思議

吉兆の「浮木様」が現れるという「明神池」

一 入る谷無し 出る沢無し 謎の水位上昇

周囲を小高い峰に囲まれた「明神池」は、注ぎ込む谷も出てゆく川もありません。しかし常に満々と水をたたえ、日照りのときでも、干上がったことがありません。ところが明治時代、池の水が溢れ出して拝殿の階段に達したことがありました。村人は「神の怒り」ではないかと大変恐れました。また1975年にも雨も降らないのに水位が上がり、拝殿まで達しました。大学の先生が調べましたが、原因は分かりませんでした。

二 神社の前の道も 聖域である

現在、「池神社」と「明神池」の間には国道425号線が通っています。しかしここを通って遺体を運ぶと良くないことがおこると言われており、昔は葬儀の際は棺を車から降ろし、反対側の湖畔の道を人力で運んでいました。伝説によれば、昔は拝殿のそばまで池が広がっており、赤い鳥居は水に浸かっていたということです。つまり国道は御神体の上を通っているも同然なのです。

三 池に石を投げると 雷雨になる

池に石や木を投げたり汚したりすると、たちどころに雨が降ると言われています。あるとき旅人が「自分は氏子ではないから大丈夫」と思って石を投げたところ、雷が鳴り響き、豪雨になったということです。また「池に船釘を投げ込むと龍が現れる」と聞いた男性が船釘4キロを投げ入れたところ、雷鳴がとどろき池が波立ってそこから巨大な龍が天に昇ったということです。男性は文字通り「龍の逆鱗に触れた」ため、その場で気絶してしまいました。

四 鯉や亀を殺めると天罰が当たる

「明神池」は御神体であるため、釣り糸を垂れることも船を浮かべることも、また足を踏み入れることもしてはならないと言われてきました。ところがある男性が池の鯉を釣ったことを、床屋で自慢したのです。すると急病にかかってしまいました。医者に行っても治らないので神社に謝りにきたところ、ケロリと治ったそうです。現代でも池の鯉や亀を殺した方が、二人とも翌日事故で亡くなったという話がありますので、殺生は禁物です。

五 神域の木を伐ると祟りがある

神域の木を伐ると、その場で気を失って「100年の眠り」につくと言われています。「池神社」の御神木は神社の北20mほどの位置にあった直径3m以上ある大木で、「矢立の杉」と呼ばれていました。それが大阪城の建材にするため、秀吉の命令で伐られることになりました。もちろん村人は誰も伐ろうとしません。しかし秀吉の落としだねと言われる荒くれ者の兄弟がこの地を訪れ、御神木に斧を入れました。

ところが打ち込むたびに刃がこぼれてしまいます。兄弟は斧を研ぎながら木に切れ込みを入れましたが、翌朝その切り屑が木に戻り、元通りになっていました。次の日も同じ事がおこりました。そこで兄弟は、木屑を夕方に焼くことにしたのです。こうして木は伐り倒されてしまいました。その後「神の審判」がどのように下ったかは、六の「浮木様」の項目をご覧下さい。

ちなみにこの兄弟は後日、「明神池」の水を池原へ流そうと思い立ち、池の周りの木を伐り始めました。すると池が波立ってきて二人は気絶してしまいました。目覚めたときふと見ると斧の柄が腐っており、驚いて村に下りると三年の歳月が経過していたということです。

晩秋の池神社

池をはさんで対岸の遊歩道から眺めた池神社

明神池の周辺で見られる秋の花　リンドウ

池神社の本殿　外削ぎの千木が男神をまつる神社であることを示しています

岸辺の古木　カワセミが止まっていることもあります

六 「浮木様」が現れる

池には長さ4mほどの太い古木が、長年浮いたり沈んだりしていると言われています。木の上には苔や草が生えていますが、これは御神木だった「矢立の杉」の梢の部分「末木」であるといわれており、「浮木様」と呼ばれています。「浮木様」が現れるのは吉兆で、世の中にめでたいことが起こったときは池の中をグルグル回るそうです。また上に亀が数匹乗っていることもあり、これは神様が遊びに出られたものと考えられてきました。

「浮木様」は大阪城で不幸があるときは必ず現れ、大阪夏の陣で城が燃えたときは七日七晩池を回り続けました。御神木を伐った豊臣を、池の神様は決して許さなかったということでしょう。また「国家の一大事」が起こる前にも現れるとされており、戦前にも何度か目撃されました。最近では2011年6月に現れています。それは長さ4mほどの真っ白な木で上には草が茂り、亀が一匹乗っていたそうです

七 水神の龍が立ち昇る

池の近くに住む村人の話です。家族3人でお参りをしていたところ、突然池がざわめき、中央に大きな「水柱」が立ちました。それは滝を逆さにしたような形で、「龍神が飛び立たれた！」と思い、3人で手を合わせたということです。またある日、御神事をしていると池が波立ち始め、ほとりの「餌やり場」に集まっている鯉が逃げ出しました。瞬く間に池が泥で濁り、池の半分が真っ赤に染まりました。やがて池の中央に、「巨大な白蛇」のようなものが現れたそうです。驚いて拝殿に戻り供えてあった生卵をとってきて池に投げると、急に静まり返ったそうです。1995年の話です。

「花の窟神社」の雨乞い物語

世界遺産「花の窟神社」へ「明神池」の龍神を招いた奇跡譚

次に、現代では貴重な「雨乞い物語」を紹介いたします。熊野市にある世界遺産「花の窟神社」の氏子総代、和田さんから聞いた話です。

役行者に踏まれた大蛇の頭が落ちたとされる「有馬の池」（現在の「山崎運動公園」）がある熊野市有馬町では、昔から「明神池」の水で「雨乞い」を行ってきました。最後の「雨乞い」が行われたのは昭和25年8月。これは往復50キロ以上を歩いて「明神池」に行き、竹筒に汲んできた水を「花の窟神社」に供えて「雨乞い踊り」を踊るというものです。地区の長老から依頼を受けた和田さんたち青年団の一行は、決まり通り8人ずつ2組に分かれて準備をしました。1組目は「明神池」まで行き、2組目は途中の熊野市五郷町で待機し、霊水を受け取る予定でした。

ところが「五郷まで車で行ってもバレないだろう」と言った者がおり、全員がそれに賛同してしまったのです。若者たちは車から降りたあとはまじめに池まで歩きましたが、翌日一晩中踊っても、一滴の雨も降りませんでした。

次の日途中まで車を使ったことが判明し、そのせいで雨が降らなかったということになりました。そこで五日後にやり直すことになったのです。和田さんたちは夜に出発し、深夜に「明神池」に到着。参拝したあと「天罰が当たらないか」と不安に駆られながら「池の神様を怒らす」ために神社の前で大騒ぎをし、池に木や石を投げ入れました。そして4本の竹筒に水を汲み、無言で帰ったのです。翌朝、「花の窟神社」に水を供えて祈願をしました。

夕方「すぐ来なさい」と呼ばれた和田さんが神社に駆けつけると、横の海岸で地区の人たちが騒いでいます。見ると沖合に灰色の雲が垂れ込め、その下を真っ黒な「竜巻」が北へと移動しているではありませんか！「それを見た瞬間、畏怖と感動で全身に鳥肌が立った」と和田さんは言います。やがて蓑と笠を着けて「雨乞い踊り」を踊り始めると、天が抜け落ちたかと思うほどの土砂降りとなりました。雨は半時間以上続きましたが、村人は嬉しさの余り、濡れるのも構わず踊ったということです。

「これが信仰の転機になった」という和田さんはその後修験の世界に身を投じ、83歳（2011年現在）となった今も「大峯奥駈け」を行っています。和田さんは「日照りになったら、また雨乞いをしよう」と心に決めていましたが、その後60年以上経った現在まで、一度も雨乞いが必要なほどの日照りにはならなかったそうです。

熊野古道の途上にある「花の窟神社」

火の神カグツチノミコトを産んだため、灼かれて亡くなったイザナミノミコトの墓所とされる日本最古の神社です。高さ45メートルの岩盤が御神体で、神社の右手には熊野灘が広がっています。

文明と文化、信仰の「終着駅」日本

――ユネスコ憲章から見た「世界遺産」の意義――

「和」の国の文化と信仰

大陸と陸続きだったことのある日本は、サハリンや朝鮮半島との間の「陸橋（りくばし）」を通って、あるいは小舟を操りながら「黒潮」に乗って、ユーラシア大陸やアジアの島々から実に多くの民族が渡ってきた国です。

「島」という限られた空間の中で、各地から訪れた人々の文化と信仰は時に対立しながらも長い時間をかけて混ざり合い、独自の発展を遂げてきました。

「紀伊山地の霊場と参詣道（さんけいみち）」に見られる信仰の世界をひもとくと、そこには先住の人々の「カミ」の概念や日本特有の「神道」、中国由来の「道教」や「仏教」、さらにはインド直輸入の「仏教」と、紀元前2000年に成立したとされる「バラモン教」の影響すら見え隠れします。

そして日本に多大な影響を与えたこうした大陸の文化の中には、「西域」の文化や信仰が様々な形で折り込まれているのも事実なのです。

この視点から見ると、日本というのは世界中のあらゆる民族の文化を吸収し、独自の伝統の中に昇華させてきた国であると言えるでしょう。

わたくしたちは世界に存在する「多様な文化」を学ぶことによって、ある国、ある地域の文化の「かけがえのなさ」を見出だすことがあるのです。

熊野灘の夕暮れ

多様性を尊重する世界遺産の意義

では「世界遺産」というのはそもそも、何のために作られたのでしょうか。その答えを得るため、「ユネスコ憲章」の序文を見てみましょう。それはこのような書き出しで始まっています。

「戦争は心の中で生まれるのであるから、人々の心の中にこそ、平和のとりでが築かれなければならない」

そしてこう続きます。

「互いの習慣や生き方に対する無知」こそが、戦争の原因である「疑惑と不信」を引き起こしたのであると。

その上で真の平和は、「政府の政治的・経済的取り決め」によるものではなく、「知性と深い精神性」に裏打ちされた「人類全体の団結」によってもたらされるものであると結論づけています。

しかしわたくしたちは相互の無知を、どうやって解消すればよいのでしょう。実はそのための非常に有効な手段のひとつとして考え出されたのが、1972年に採択された「世界遺産条約」だと言えるのです。

これは「人類全体の資産」とみなされる特に貴重な文化や自然を紛争や開発による破壊から守る、という作業を共同で行うことによって、人々の中に理解や協調の精神、並びに「誠意にもとづいた永続的な平和の実現」に向かう強い「意志」を喚起しようというものです。

ただ、そうした「遺産」の存在価値に気づきそれを守っていこうという姿勢は、「他者の文化や信仰」に対する深い「敬意」――すなわち「戦争抑止力」とも言うべき「多様性を尊重する精神」――が無ければ決して築かれるものではありません。

行仙岳から望む冬の釈迦ヶ岳

前鬼（ぜんき）の祠（ほこら）

「持続可能な観光」が果たす新たな役割

こう考えると近年、イコモスの「国際文化観光憲章」に見られるように、「世界遺産」を受け継ぎ守り抜こうという機運を高めるための新たな「推進力」として、「遺産」に直に接することのできる「観光」の重要性が見直されてきているというのがうなずけます。

かつて「観光」というのは、「遺産」の保護を脅かすものとみなされてきました。しかし現代においては「遺産の価値を尊重」しながら行われる「持続可能な観光」は、「遺産」に象徴される「その地域の人々の生き方」を広く世界に知らしめるだけでなく、「遺産」が持つ「物質的かつ精神的な価値」を未来の世代に引き継ぐ大切さを全ての関係者が深く理解するための、極めて重要なツールであると考えられているのです。

大峰南奥駈道の行仙岳登山口から東方を望む

究極の巡礼地「大峰奥駈道」

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、海外では［Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range］と紹介されています。

下北山村・正法寺の梅

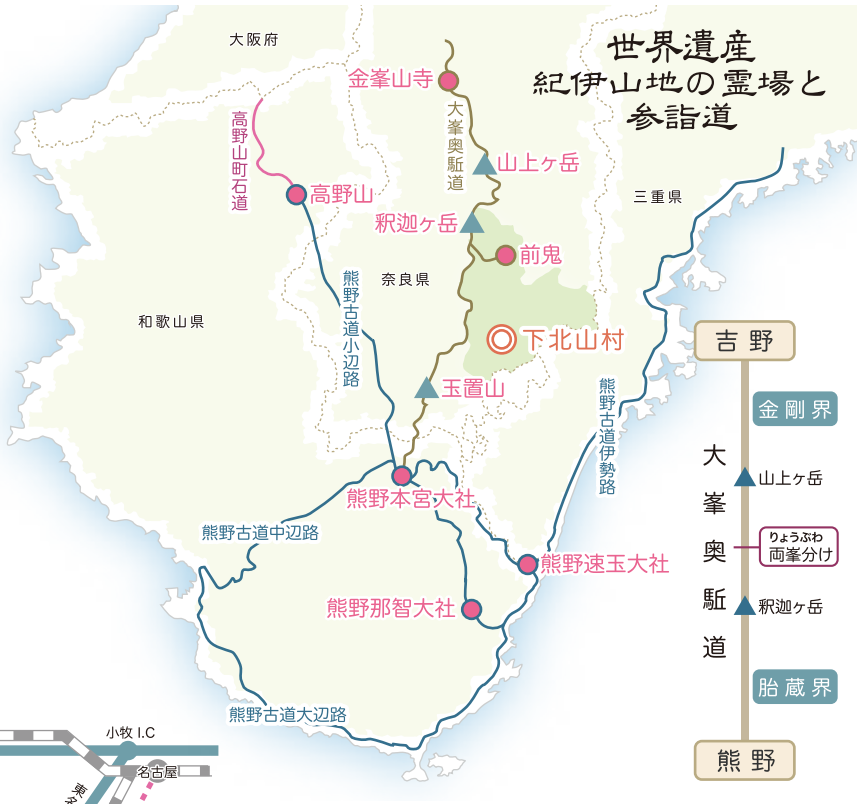
直訳するならば「紀伊山地の聖地と巡礼道」。ここで言う「聖地」は「吉野・熊野・高野山」といった「霊場」を指し、「大峯奥駈道」や「熊野参詣道」（別名「熊野古道」）、「高野山町石道」は共に「巡礼道」と呼ばれています。

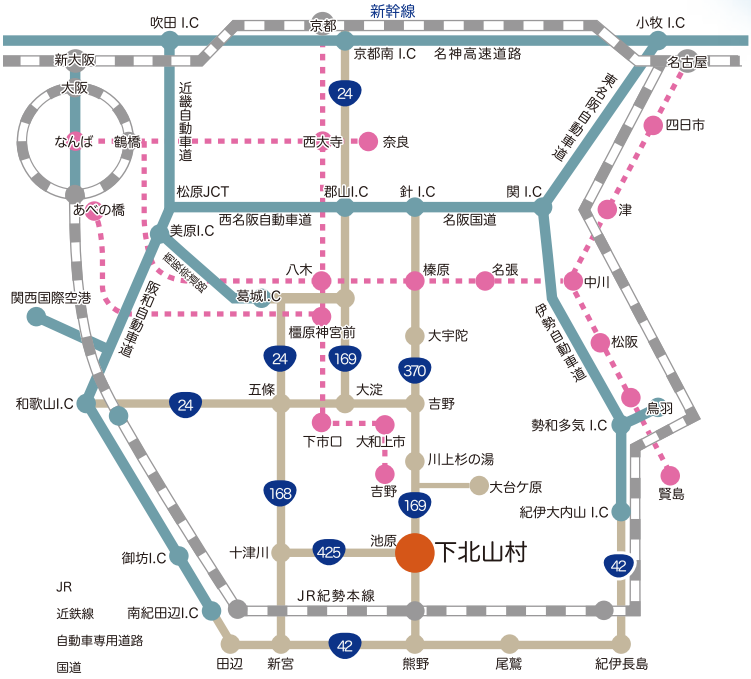
古の時代から数多の人々が歩み、祈り、「神秘の世界」に分け入った巡礼の道。そこをたどる旅人がまなじりを決した「修行者」であれ一般の登山者であれ、奥深く美しい道の途上で身も心も浄化されるならば、ひたすら神を讃える「無垢な心境」や「心の平安」を得ることができる――そのような究極の「巡礼道」として「大峰奥駈道」は今なお息づいているのです。

下北山温泉きなりの湯

【きなりの湯・きなり館】

泉質／ナトリウム－炭酸水素塩・塩化物泉
効能／神経痛・筋肉痛・関節痛・慢性婦人病・慢性消化器病など
特徴／ヌルリとした美肌の湯
料金／大人６００円　小人３００円　身体障害者(要証明書)400円
施設／サウナ・露天風呂　畳の無料休憩室
　　多目的トイレ　レストラン　売店
定休日／第二第四火曜日
温泉営業時間／平日：１１時～２１時半(最終受付２１時)
　　土日祝：１０時～２２時(最終受付２１時半)
レストラン/１１時半～２１時(ラストオーダ２０時半)
住所／〒639－3805　奈良県吉野郡下北山村上池原２８１
電話／07468-5-2001





下北山スポーツ公園

【宿泊施設(やすらぎ・くすのき)】

営業期間／年中無休
(12/29～1/3は素泊まりのみ)
料金／1泊２食　大人７200円(税別)～
　　小人６700円(税別)～
一人でのご利用／５００円(税別)割増し
２０人以上でのご利用／500円(税別)割引き
チェックイン／15時
チェックアウト／10時
朝食／７時～8時半
夕食／１８時～２０時半
入浴／１７時～２２時(きなりの湯入浴可)
施設／テニスコート、サッカー場、池の平ゴルフ場、
　　コテージ、オートキャンプ場
住所／〒639－3805　奈良県吉野郡下北山村上池原１０２６
電話／07468-5-2711

所　用　時　間

●公共交通機関

●大阪あべの橋から約3時間30分(あべの橋 近鉄 →大和上市 バス =川上杉の湯=池原)
●京都から約4時間 (京都 近鉄 →橿原神宮前乗換え→大和上市 バス =川上杉の湯=池原)
●名古屋から約5時間 (名古屋 近鉄 →八木乗換え→橿原神宮前乗換え→大和上市 バス =川上杉の湯=池原)
　　約4時間30分(名古屋 近鉄 →(JR紀勢線経由)→熊野 バス =七色＝(平日のみ村営バス)＝池原)

●自動車

●西名阪自動車道・郡山I.Cから約2時間半 (R24→R169)
●名阪国道・針I.Cから約2時間半 (R370→R169)
●熊野から約45分 (R42→R309→R169)
●橿原から約2時間 (R169)
●関西国際空港から約3時間半(阪和自動車道→南阪奈道路→R165→R24→橿原市R169)

お問い合わせ

〒639-3803　奈良県吉野郡下北山村寺垣内983
下北山村役場　地域創生推進室
TEL：07468-6-0001(代表)　FAX：07468-6-0377
http://www.vill.shimokitayama.nara.jp/

下北山スポーツ公園の桜並木